様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22　４月　２６現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：２００６～２００８
課題番号：１８３２００４０
研究課題名（和文）幕末明治初期の日本文学と「民衆」思考に関する総合比較研究

研究課題名（英文）Comparative Research on Japanese Literature and Popular Thought in the Bakumatsu and early Meiji Eras

研究代表者　ロバート・キャンベル（ROBERT　CAMPBELL）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：５０２１０８４４

研究成果の概要：

１．出版と庶民教化
２．寓意言説の展開
３．都市風俗誌〔明治版繁昌記モノ〕の系譜
４．音曲と思考

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
２００７年度	3,200,000	960,000	4,160,000
２００８年度	3,200,000	960,000	4,160,000
年度			
年度			
総　計	10,000,000	3,000,000	13,000,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：日本文学、出版史、民衆啓蒙、近世文学、近代文学

１．研究開始当初の背景

近年、西洋史を論じる際に言及されることが多い「長い１９世紀」という概念を、日本の史実にそのまま当てはめようとするならば、それはさしずめ海外に対する危機意識が高まる寛政年間（１７８９～１８０１）に始まり、明治維新を分岐点とし、日清戦争での勝利においていちおうの終止符を打ったということができるであろう。近代とそれ以前のいわば要として重大な役割をはたしたのが明治維新とその前後の時代だが、昨今の国内外の日本文学研究において、この約３０年間が、あたかも文学不在

のエポックであったかのように論じられ、あるいは単に黙止されてきた。

その理解は、確かに近代文学成立以降の、小説を中心とした文学史観に即して考えるとき、当然の成り行きともいえよう。しかし本研究で照準にすえる幕末明治初期の日本文学とは、その小説史の重要性を認めつつ、しかし小説のみでは完結しない文学史全体の豊かな可能性を残していることを指摘していいはずである。

たとえば幕末という変動期をとおして作られた勤皇家の詩歌を見ていくと、ペリー来航から鳥羽・伏見の戦いまでに勤王詩人（歌人）がものした作品は、風説書などに書き付けられ流布したもの、獄中で口承され外部に持ち出されたもの、あるいは遺品から拾い上げられて転写されていったものなど、さまざまな媒体として成立した。これらはアクチュアルな事変に取材し、当事者らの精神様態をつたえる重要な記録として筆記され、民間で広まったうえで維新後、大量の遺詠遺文集として集大成され、公刊されるようになっていった〔ロバート キャンベル「獄舎の教化と『文学』」（東京大学国語国文学会『国語と国文学』第８０巻第１１号、平成１５年１１月）〕。明治初期においても、政治史あるいは思想史の領域と見なされてきた啓蒙家の著作物には、文学研究の材料として重視してしかるべきものが多々ある。一例は、教部省（明治５年設立）が全国に任命（または派遣）した教導職による説教であり、明治ゼロ年代を通して、説教読本やマニュアル類が、中央・地方の板元の手によって量産され流通し、説教の対象たる「民衆」の恰好の読み物となっていた。新作小説の出版点数が前後に比べて少ない幕末明治初期においての、文学史が本来取り上げ、考究すべき領域であることは間違いあるまい。

幕藩時代の日本庶民は、つねに伝統的規範概念を対置軸として、複層的でゆたかな通俗文化を築き上げていた。しかし明治以降、従来の「雅俗」意識が薄れ、四民平等を建前とした国民化が進んでいくなかで、民衆そのものの姿も大きく変容した。本研究では、従来政治史や思想史などの研究領域にのみ主題化された幕末明治初期の「思考」問題を、文学研究の方法を用いて、根本的に問い直してみたいと考えている。民衆が参画し得る「思考」の中核をなすものが何かを簡便に言うのならば、それは教化（教訓、教育）であり、その教化の所在と意義は、とりもなおさず当時の多様な文献資料にのみ求めることができると考えるのである。文学研究として「思考」を取り上げ、幕末明治初期の日本文学史を修正・拡充することの必要性と、その独創性がこの点に深く関わっていると言うことができよう。

２．研究の目的

本研究では、文学と「思考」を取り結ぶエリアとして、次の４つの柱を立て、文献調査と具体的な考証を加えながら、その成果として幕末明治初期の文学史に新たな展開を与えることを目的とする。

１．出版と庶民教化
２．寓意言説の展開
３．都市風俗誌〔明治版繁昌記モノ〕の系譜
４．音曲と思考

従来のジャンルに拘泥せず、できるだけ当時の文学状況に即して「思考」と文学の

交通する領域　―　通俗歴史書、地誌、小説、挿絵、紀行文、新聞投書、音曲（音楽）、身体論、学芸論など　―　を分析することによって、近世から近代への移行期を浮き彫りにしたい。その分析から浮かび上がるであろう新知見が、「長い１９世紀」の後半に出来する世界規模のグローバル文化に、日本をどう定位すべきかという問いに対して重要な示唆を与えると思われる。
以下では、本研究を形成する４つの領域と課題を簡単に説明しながら、本研究におけるそれぞれの必然性と位置づけを述べることにする。

１．　出版と庶民教化

近世期から近代にかけて、日本のいわば出版インフラが社会全般に重大な役割を果たしたことは言うまでもないことだが、本研究では、幕末から明治初期において、出版行為が庶民教化にどう関わるかを、具体的に検証する。プロジェクト全体にわたる前提に位置づけるべき問題であり、いわゆる民間教訓書から儒家の言論、維新期以降は初期新聞の雑報・論説・投書・広告欄、太政官の出版にかかわる通達と公文書などから、出版と出版流通（新聞雑誌をふくむ）をめぐる言説を収集解析することによって研究を進める所存である。

２．　寓意言説の展開

慶応年間（１８６５～１８６８）に幕府が抱える洋学者の間に英語版『イソップ物語』が輪読され、その日本語訳も、彼らが発行し流布させた『中外新聞』（整版、慶応４年２月～６月発行）に掲載された。またその一員であった渡部温が、独自の和訳『通俗伊蘇普物語』を明治６年に東京で発刊したが、これらのことが契機となって、以後１０年間ほど日本各地の新聞雑誌または単行本として、『イソップ』を模倣したいわば日本版「イソップ」寓話が大流行する。早い例として福沢諭吉の女性向け教訓書『かたわ娘』（明治５年刊）を指摘することができるが、教訓を企てた単行本にかぎらず、儒者の文集から、各地の小新聞に掲載された投書にいたるまで、当時の文学風土をすっぽり覆うほどの現象にまで発展した。近世期小説にみる従来の「寓意」言説との相違を測りつつ、近代期の世相と生活意識に対する当時の思考言論を解明する手だてとしたい。

３．都市風俗誌〔明治版繁昌記モノ〕の系譜

天保年度に刊行された『江戸繁昌記』（寺門静軒著、５編５冊）は、明治時代を通して後印のかたちで読み継がれていたが、一方幕末期以来、これをモデルとして『何々繁昌記』という各地の風俗世相を記した地誌小説が産み出されていた。文久元年『横浜繁昌記』（柳河春三著、１冊）に始まり、明治１０年代までに３０種類以上の『繁昌記』が漢文または日本語で書かれ、刊行された。各地に残る類似の写本とあわせて豊穣な文献群だが、基礎的な書誌調査をふくめ、手付かずの領域となっている。「繁昌」概念およびその描出には、概して風刺がこめられており、その読解を通じて幕府の瓦解から自由民権運動台頭までの当世批判を俯瞰し、表現と思考の意味づけを考察することは可能である。

４．音曲と思考

東京大学駒場キャンパスには、全国有数の近世音曲（音楽）および演劇書コレクションが保有されている（「黒木文庫」）。３，０００点余のこの蔵書を、「電子版黒木文庫」としてインターネット上に無料公

開する作業にとりかかるして、あわせて東京大学教養学部・駒場博物館において企画展覧会「江戸の声」、２００６年３月～５月に開催する。このように整備された音曲文献を材料として、幕末明治初期の俗曲にみられる新世相の投影や、芸能改良の運動から見えてくる当世「思考」の諸問題を取り上げ、具体的に検証することを目標とする。近世芸能と文学を総合的にとらえようとする研究は、近年ますます隆盛をみせるが、俗曲の表現とプラクティスを文学研究と結びつけて論じる試みは、きわめて少ないのが現状である。

３．研究の方法

まず上記４項目について文献調査と収集に着手しながら、収集した資料を順次整理し、データ化する作業を開始する。具体的に、

１．出版と庶民教化

儒家言論の調査と収集について、先ず都内の主要な保有機関（国立国会図書館所蔵鶚軒文庫、大東文化大学所蔵市川任三旧蔵書など）において嘉永末年以降明治１０年頃までに刊行された詩文集を調査することとする。民間教訓書の整理と平行して行い、購入したパソコンを用いて書目作成およびテクスト入力・校訂に着手する。新聞調査と採取・整理も進め、分析に備えるようにする。

２．寓意小説の展開

近世小説における寓言論および寓言小説について、とくにその後期の展開について、調査を開始する。幕末以降の翻訳・翻案・創作寓話について、単行書を各地の保有機関で書誌調査すると同時に、当時の文献資料を古書店などで購入し、データとして処理する作業に着手する。新聞雑誌における展開をたどるために、国立国会図書館および東京大学法学部・明治新聞雑誌文庫所蔵の新聞雑誌から年次を追って調査し、相当量の複写をしながら整理にかかる。

３．都市風俗誌

都内にかぎらず各地方に点在する幕末明治初期の「繁昌記モノ」の所在確認を終え、実地での調査と収集を開始する。写本で伝わるもの（慶応元年成立『草津繁昌記』１冊〔堀秀成著、西尾市立図書館岩瀬文庫所蔵〕、同年成立『伊勢繁昌記　初編』１冊〔畑中澹庵著、岩瀬文庫所蔵〕等）をふくめ、すでに３０種類以上の存在は確認されているが、新出資料の出現も予想されるので、初年度では「繁昌記モノ」の全容を明らかにすることを計画の中心に据えたい。海外に取材した丹羽純一郎訳・ジョン・マレー原著『英国／龍動新繁昌記』５編５冊（明治１１年刊）と、同人訳・ガリグナニイ原著『仏国／巴里斯新繁昌記』初編１冊（同年刊）は、「准文学的著作」になぞらえられるが（柳田泉「織田純一郎伝」）、統一的な翻訳ではなく、ロンドンとパリそれぞれの当時の観光ガイド（英文）に依拠しつつ設えられた虚構であることが、本研究の準備中に分かった。日本人による海外「繁昌記モノ」の典拠と執筆手法を一箇の比較対象として考察することによって、近代小説出現の前夜における文学状況を位置づけなおすことができそうである。

４．音曲と思考

来春電子公開が予定される東京大学教養学部・黒木文庫の音曲資料を調査し、とくに幕末明治初期の俗曲正本および俗曲興行（または稽古）における時事・世相への投影や、新曲作成および実演（稽古）をめぐる人物交流について調査を開始する。

４．研究成果

１．出版と庶民教化　幕末期から明治前期にいたるまでの儒者による啓蒙的著作と新聞掲載の啓蒙資料を網羅的に収集し、校訂した。岩倉使節の報告書である『米欧回覧実記』について詳細な注釈を施し、民間への流布について検証した。

２．寓意言説の展開　明治初期の「寓話」言説を単行本および各地方発行の新聞から収集し、校訂した。

３．都市風俗誌〔明治版繁昌記モノ〕の系譜　『江戸繁昌記』に続く幕末から明治前期のいわゆる「繁昌記モノ」20 数種類を確認して集し、書誌調査を行った

４．音曲と思考　「電子版黒木文庫」を立ち上げ、書誌について確認作業を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）
鈴木俊幸「学問と文芸と生活と―近世後期民衆の学芸世界」（『文学』巻８-3、2007 年 5 月。pp.39-50）

佐藤悟「文化元年の出板統制と考証随筆―『絵本太閤記』絶板の影響」（『文学』巻８-3、2007 年 5 月。pp.181-190））

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計 2 件）
ロバート・キャンベル『米欧回覧実記』校注及び解説（『海外見聞集』所収〔共著、『新日本古典文学大系　明治編』５、岩波書店、2009 年６月〕pp.45-248）

ロバート・キャンベル『古典日本語の世界―　漢字がつくる日本』（共著、東京大学出版会、2007 年 4 月。pp.1-pp.277）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計 0　件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
ロバート キャンベル（ROBERT　CAMPBELL）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号　５０２１０８４４

(2)研究分担者
鈴木俊幸　（SUZUKI　TOSHIYUKI）
中央大学・文学部・教授
研究者番号　００２１６４１７

佐藤　悟（SATO SATORU）
実践女子大学・文学部・教授
研究者番号　５０１７８７２９

(3)連携研究者